

創刊110周年記念

誇れるふるさと

24地区リレー

〈vol.14〉

〈原② 課題とキーマン〉

原地区は、2016年に策定した地域づくり計画を、今年4月に改定。その中で、今後も進むと予想される少子高齢化、海抜0メートル地域の風水害や地震による被害、不審者の継続的な発生、地域資源の活用を主な課題としている。

長寿のまちへスポーツ行事に力



3年ぶりのふれあいまつりで演奏する原連鼓太鼓のメンバー（10月30日撮影）

「やれない理由より、やる方法考える」

それを踏まえ、地域づくりの目標には▽「原つ子の健全育成と長寿のまちづくり▽地域の安心安全と生活環境の改善▽地域資源の活用とコミュニケーションの活性化」を3本柱に掲げた。

原つ子の健全育成の主体団体は、子ども委員会（利重征史会長）など。田植えや稲刈りの体験、通学合宿などの行事を支える人の数は十分とは言えず、顔ぶれに大きな変化はない。利重会長は「仕事をしている世代は、地域に意識が向かない気持ちに分かる。やれることを無理せずやっていきたい」と話す。

長寿のまちづくりのため、体育振興会（宮崎正

憲会長）が中心となって各種スポーツ・多世代交流行事を開催している。会員28人のうち、3分の2は40〜50歳代。数年前から新しい担い手の獲得に力を入れ、会の活性化を図った。

地域の安心安全に向けて、地区主催の防災訓練に小・中学生も参加。防災力向上に取り組んでいる。また、自治会ごとに防犯推進委員を選任し、同計画に新たに盛り込むなど防犯体制の強化を進めている。

地域資源の活用の一つが、原連鼓太鼓の継承。発足33年になり、小学生20歳代の5人が活動している。今秋、3年ぶりに、ふれあいまつりが開催され、オープニングで演奏して祭りを活気づけた。連鼓太鼓の運営主体で、地域づくりグループ・根つこの会の三戸総会長は「最盛期は二十数人いた団員が、コロナ禍で発表機会が無かったことなどから5人に減った。小・中学校にPRし、団員の増強に努めたい」と語る。

改定された同計画について、コミュニケーション推進協議会の金重和義会長は「やれない理由より、やる方法を考えるをキーワードに、新しい生活様式を踏まえた行事を実施していく。防犯など従来の取り組みを、より充実させる」と話している。